

みんなの童話

正一じいさんの描いた絵



正一じいさんは絵をかくことが大
すきです。

公園のすみに置かれた、こわれか
けた古い電車の絵をかいたのが、秋
の文化祭で入選しました。

今朝も早くからスケッチブックを
持って、ごんげん山の山桜をかこう
と車で出かけました。

いつもの散歩道から見えるごんげ
ん山の緑の森の中に、ひときわ目だ
つ、うすいピンクの山桜が気になっ
ていたので。

うす暗い竹林をぬけた所に大きな
池がありました。池には空が美しく
うつっていました。ほっとした正一
じいさんは目を見張りました。池の
むこうにピンクの山桜が、池にかぶ
さるように咲いていました。

池の水には緑の草や、ピンクの桜
の花がうつって風がふけば、ゆらゆ
らゆれて、美しい絵のようでした。

正一じいさんは、さっそくイーゼ
ルを立ててかきはじめました。

時間も忘れて絵筆をはしらせまし
た。桜の木には満開のピンクの花を
枝いっぱいにかきました。池にう
つっている緑の草やピンクの山桜も
かきました。

(これでよし)と、自分のかいた絵
を見てびっくりしました。かいたは
ずもない金色のきつねが、桜の木の
根元にかわいい目をして、すわって
いる絵になっていました。

池のむこうの桜の木の根元を見る
と、金色のきつねが正一じいさんを
かわいい目で見つめるのでした。

正一じいさんはびっくりして、絵
筆を池の中へ落してしまいました。
池の水に絵筆からピンクのえのぐ
が流れ出てきて、美しい絵になりま
した。

その時でした。木の下にいた金色
のきつねがザブンと絵筆をおっかけ
るように池へ飛び込みました。

正一じいさんは、本当にきつねに
だまされたと、あわててスケッチ
ブックをかかえて、走るようにして

山を出しましたが、でも道をまちがえ
たのか車が見えずさがして歩きまし
た。

家に帰って気がつくと、スケッチ
ブックだけ持って絵の道具はみんな
山へ忘れてきてしまったのです。

正一じいさんは、山桜の絵と賞を
もらった電車の絵を客間に並べてか
ざりました。

正一じいさんは金色のきつねがふ
しぎでならなく、毎日のように見て
は考えていました。(金色のえのぐも
持っていないし)

でも山桜はとても美しくかけてい
るので、自信たつぷりでした。
何日か過ぎて、金色のきつねのこ
とも忘れていた夜のことでした。

ゴトゴトゴトツと、変な音で目を
さました正一じいさんは、音のする
ほうへ行ってみると、広いローカか
らでした。正一じいさんは、腰がぬ
けるほどびっくりしました。

音をたててローカを走っているの
は、絵にかいた電車で運転をしてい
るのは、金色のきつねだったのです。
正一じいさんは、まさかと目をこす
りながら、絵をかざっている部屋へ
来てまたまたびっくりです。絵の中
の電車もなく、山桜の金色のきつね
もいませんでした。正一じいさんは、
何かおそろしくなり、ふとんをか
ぶってねました。

朝になって絵を見に行くと、電車
も金色のきつねも絵の中にちゃん
といました。

その後、絵の中の電車も、山桜の
金色のきつねにも変わったことはあ
りませんでした。

正一じいさんも忘れかけたある夜
のことでした。

ゴトゴトゴトツと、家の外で音が
しているので、正一じいさんは、あ
わてて外へとびだしました。

ま昼のように明るい月夜の空を、
絵の中の電車を金色のきつねが上手
に運転をしていて、すいすいと空を
泳ぐように、また円をかくようにし
て、遠くへ行っていました。

正一じいさんは身動きもできずに
見つめました。もう帰ってこないだ
ろうと悲しく泣いていました。

金色のきつねは、あの電車が気に
いって、楽しく乗って遊んでいるの
だろうと、思うことにしました。

正一じいさんは、絵の中がさみし
いので、元通り電車の絵をかきまし
た。金色のきつねも山桜の木の下の
かわいくかきました。

(あれ・・・)正一じいさん
が気がつくと、ごんげん山に忘れて
きた絵のどろぐが、いつのまにか、
きちんと絵のがくの下においてあり
ました。

しろやま会員 中川 かなめ